

はじめに

我が国の人工林の約5割は主伐可能な時期に達しているものの、林業採算性悪化のために主伐と再造林が進まない状況にあります。このため、豊富な人工林資源の循環利用促進が重要な政策的課題となっており、林業の収益性向上を図る技術開発が急務です。このため平成25(2013)年に改正された「森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法」に基づき、第二世代の精英樹(エリートツリー)等、「成長に優れた樹木」が特定母樹として指定されました。さらに苗木生産の基盤となる採種園、採穂園の整備が進められ、「成長に優れた苗木」を用いた新たな人工林施業体系の構築が求められるようになっていきます。また、「森林・林業基本計画」(令和3(2021)年6月閣議決定)においても、成長に優れた苗木の活用に取り組むこととしています。こうした成長に優れた苗木は、種子を生む母樹管理から、播種や施肥と言った育苗工程の最適化によってより健全性が增強され、山に植栽した後の成長を観察して「成長に優れた樹木」としての優位性が証明されることになります。このことを実証するために農林水産技術会議・現場ニーズ対応型研究委託プロジェクト「成長に優れた苗木を活用した施業モデルの開発(2018～2022年度)」が実施され、成果の総括として「エリートツリーを活かす育苗と育林、施業モデル」や「クリーンラーチ・カラマツ類の優れた成長を活かす育苗と育林、施業モデル」を発刊しました。

このプロジェクトは森林総合研究所及び林木育種センターを中心とし、福岡県、長崎県、佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、高知県、徳島県、岡山県、広島県、長野県、島根県、静岡県、北海道、九州大学、宮崎大学、鹿児島大学、岐阜大学、南栄、三井物産フォレストによる共同研究になっており、それぞれの組織から詳細な研究成果が得られています。本パンフレットではこうした研究機関による具体的な研究成果を兄弟パンフレットの「エリートツリーで下刈り省略」と共に、かみ砕いて紹介しています。

本パンフレットの構成はスギ・ヒノキに関する母樹の管理から播種方法、密度管理、施肥作業、およびそれらのスケジュール、苗木の育つ環境条件と山に植栽されてからの成長観察結果まで多岐にわたり、濃淡はありますが最新の育苗研究情報を掲載しております。

それぞれの研究成果が森林行政の方々及び育苗業者の皆様へのヒントになれば、また地域の研究者の顔を知っていただき、今後も苗木開発に関する「問題解決型研究開発」の礎になればと考えております。

森林総合研究所・研究コーディネーター 宇都木 玄

